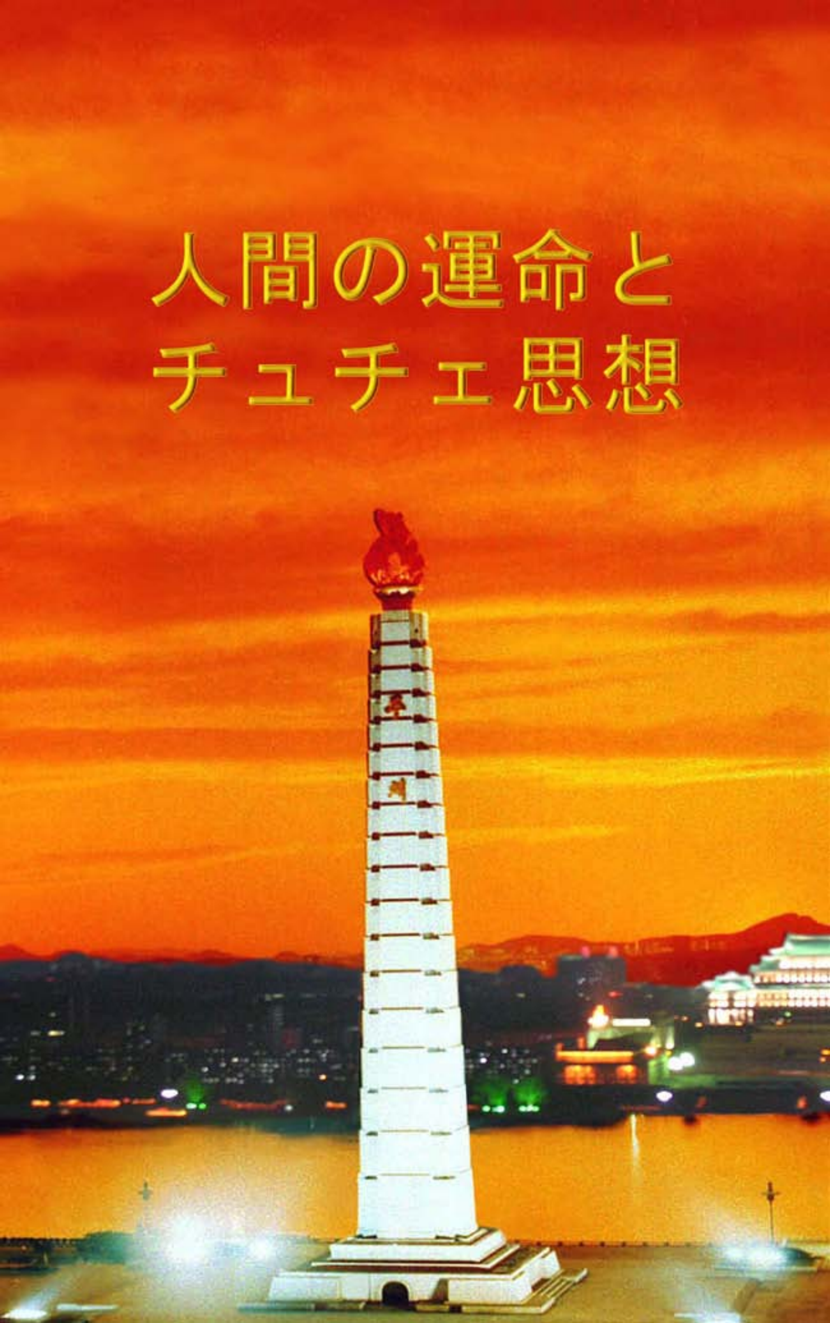
人間の運命とチュチェ思想



人間の運命と
チュチェ思想

朝鮮・平壌
外国文出版社
チュチェ101(2012)年

目　次

はじめに

人間にとっての最大の関心事は、自己の運命問題、運命の開拓問題でありましょう。人間の思想と活動の目的は過去も現在も、それが単純なものであれ、複雑なものであれ、いずれも根底的には自己の運命の開拓と関わっています。だから人間学と呼ばれる文学は、人間の運命問題を永遠のテーマとしているのであり、宗教もまた人間の運命をあれこれと論じて人びとをひきつけているのではないでしょうか。

数百万年前における人類の出現以来、人間は自らの運命問題をもって苦悩しその解決に努めてきたと言えるでしょう。

ヒトは自己の運命についてたえず考え、その開拓に努めたからこそ人間になれたのであり、さもなければただの動物と変わりない存在として生きてきたことでしょう。つまり、人間はその出現以来自分の運命とは何か、それは何に関わり、どのように変化し、開かれ

ていくのかということを不断に考え探求してきたのです。とは言え、これまでいかに偉大とされた思想も、人間であれば誰もが経験するこの苦悩に満足すべき解答を与えることができませんでした。

ところが、人間中心のチュチェ思想は、この世紀的な問題に科学的な解明を与えたのです。

「地球上の後進的な小国朝鮮の地に生まれたチュチェ思想が果たして・・・」と首をかしげる向きがいるかも知れませんが、その思想の出現にはいくつかの見逃がせない要因が作用していたのです。

後進的な小国が偉大な思想の祖国になれるはずはないと考えるのは、一つの大きな偏見にすぎません。卓抜した思想はすぐれた英知の産物つまり偉人の頭脳によって生み出されるものです。過去の立ち後れた小国朝鮮は、二十世紀の偉人中の偉人金日成（キムイルソン）主席と忠実な後継者金正日（キムジョンイル）国防委員長の存在によって今日では、偉大な思想の祖国として世界に光を放っているのです。

チュチェ思想は他のどの思想とも異なり、人間を思考の中心にすえ、あらゆる問題を

人間と関係づけて取り上げ、解決する人間中心のユニークな思想です。それは既存のいかなる理論や公式にもこだわることなく、自己の運命を切り開く人間の実践活動、人民大衆の革命闘争のなかで創始された理想的な思想であり、それがゆえに人びとに大きな期待と信頼を抱かせているのです。

では、チュチェ思想は人間の運命開拓の道をどのように示しているのでしょうか。

本書では、人間の運命開拓の道を明らかにしたチュチェ思想の諸原理を、いろいろな例と結びつけて平明に解説し、初歩的な理解が得られるよう叙述されています。

一　運命開拓の出発点

「始め半分」という言葉があります。

百メートル競走でスタートが勝敗に決定的な作用をするのと同じように何事であれ出だしがよいと、結果も大きく期待されるのです。

人間の運命問題の探求も同様です。

古代ローマの哲人セネカは、「運命は、望む者は連れて行き、望まぬ者は引っ張って行く」という有名な言葉を残しました。これは、人間の運命は定まったものであり、その前に人間は無力だということを語ったものです。

このような見解の根底には一般的に、世界には人間を支配する神秘で超自然的な何かが存在し、人間の生死と禍福は、この絶対的存在によって前もって決められているという理解があります。人間が自分自身と周囲世界についてよく知らなかった無知蒙昧な時代に

は、こうした見解が人びとの頭を支配したとしても無理からぬことです。
　では、このような存在、全知全能の力をもって人間の運命を決定づける神秘な存在はあるのでしょうか。それとも、そのような存在は人間の頭の中で作り出された虚構にすぎないのでしょうか。
　もちろん人類が精神的、文化的に高い境地に達し、科学技術がめざましい発達をとげている今日、前者の立場に立つ人はそう多いとは言えませんが、全知全能の存在を否定する人たちの中にもある一つの疑問は残っています。それは、神がいないとすれば、何が人間の運命を決定づけるのかということです。
　人間の運命の支配者は誰かというのは、運命問題について考える人の誰もが最初にぶつかる根本的な問題であり、神の存在をめぐる論争においても、その根底にはこの問題が伏在しています。
　そういうわけで、人びとを自己の運命問題について考え、その開拓をはかる道に立たせるためには、まずこの問題を先に考え、解決することから始めるのが当然でしょう。

1　運命の謎

人間の運命問題は、久しい間歴史の謎として未解決のまま残され、その間、人間は自己の運命を不可思議きわまる神秘な存在の手に任せるほかありませんでした。

ギリシア神話によると、雲上にそびえるオリュンポスの山頂に築かれた華麗な黄金の宮殿には、多くの神とともに運命をつかさどるクロト、ラケシス、アトロポスという三人の女神が住んでいましたが、この「運命の女神たち」は、人間の運命ばかりでなく、世界万物の支配者であるゼウスの運命をもその手に握っていたということです。クロトは人間の誕生を支配して命の糸を紡ぎ出し、この糸が切れると命も断たれるとされ、ラケシスは人びとの生涯を決定するくじを引き、アトロポスはこうして定められた人間の運命を巻紙に記録しますが、そうなったら誰もその運命から逃れられなくなるというのです。

人間の運命がある絶対者の手に握られた宿命的なものだとする見解は、宗教ではそれぞれ教理として体系化されました。

このような見解とは異なり、「闘争は万物の父、万物の王である。それは人間を神にすることができ、また自由民にもし奴隷にもすることができる」として、神による人間の運命主宰に反対する思想家たちが古代にも存在しました。

古代エジプトの文学作品『ハープ演奏家の歌』は、蘇った死人であの世のことを語った人は一人もいないとし、あの世についてあれこれ考えるよりも現世の事に全力を尽すべきだと呼びかけています。

ともあれ、昔人びとの頭を支配したのは、神秘的ないし宗教的な観念であったため、以前は運命という語は、宿命と同義語として使用されていました。

ところで、人間の運命を宿命と同じ意味で理解すれば、どういうことになるでしょうか。

運命が人間の力ではどうにもならない宿命と同じ意味のものであるなら、人間は与えられた運命にすなおに従うほかなく、もはや人間の運命問題をあれこれ論議してもはじまらないという結論を得ることになりましょう。

しかし与えられた運命に満足せず、そのよりよい開拓に向け、うまずたゆまず努力してきた人間の実践活動と歴史の流れは、そのような虚無的な結論を頑強に否認しています。

ではどうして宿命論と現実の間にはこのような背馳が生じたのでしょうか。それは、これまで人びとが、その運命問題を実践とはかけはなれて自分を絶対者との関係の中でだけ考えようとしたからでした。

運命とは決してそのようなものではありません。

あなたが話し、私も今述べており、普通の人たちの誰もが平常考え、関心を向けている運命とは、人間が人間としての尊厳と価値を汚すことなく、誇り高い幸せな生をいとなむことができるか否かを左右する社会的境遇や生活状況、今後の見通しのようなものを一括してさす言葉です。このような人間の運命はある神秘な絶対的存在との関係のなかではなく、自分をとりまく周囲世界との関係のなかで考えられることになります。

ある人が、神を信じて現実世界から目をそらし、宗教の教理にのみ忠実に従っていれば、かれの運命、つまりかれの境遇と生活状況、前途についてはいささかの改善も期待できないでしょう。

人間が自分の周囲世界（自然と社会）を自己の要求に即して改造し変革していくならば、その社会的境遇と生活状況、前途は不断に改善されていくことでしょう。つまり、人

間の運命は洋々と切り開かれていくことになるでしょう。
運命の謎を解くためにはこのように、運命についての神秘的・宿命論的観点を斥け、人間の運命問題は本質において人間と世界との関係問題だとする正しい認識を抱かなければなりません。
人間の運命開拓の道の解明を自己の根本的な使命とする人間中心の独創的な哲学思想チュチェ思想は、歴史の宿題とされた運命の謎を解決すべく、人間と世界との関係問題を哲学の根本問題として新しく設定したのです。
人類の思想史をひもとけば、これまでのすべての哲学は物質と意識、存在と思惟の関係問題を哲学の根本問題として考察してきたと言えます。
物質と意識、存在と思惟の関係問題は、人間以外の世界の実体は果たして何であるかということを明らかにするために設定された問題です。つまり、世界は何からなり、それは自ら変化発展するのか否かを解明するための問題でした。
もちろん、この問題が解決されたとしても、それが人間の運命の謎を解くことになんらの寄与もしないなどとは言えません。なぜならば、人間の運命はかれらをとりまく世界

のなかで開拓されるわけですから、世界がどのような状態にあるかによって、それが人間の運命に相異なる影響を及ぼすからです。しかし、ただこの問題を解決しただけで運命の謎が直接科学的に解明されるものではありません。それは世界が物質から成り立つかそれとも意識から成り立つか、あるいは世界が自ら変化発展するか否かなどが明らかにされたとしても、それだけでは人間の運命は誰が主宰し、それはどのように決められていくのかという問題が解決されるのではないからです。

人間の運命問題に正しい解答を与えるためには、人間と世界の関係問題に目を向け、その問題からまず解明していくべきでしょう。つまり、人間と世界の関係において、人間が世界を支配する地位にあるのか、それとも世界に支配される地位にあるのか、また、人間が世界の変化発展でどのような役割を果たすのか、言いかえれば人間が世界の変化発展に決定的な作用を及ぼすのか、それとも世界の変化発展が人間の運命を決定づけるかという問題が解明されなければならないのです。

世界のなかで生き、活動する人間は、世界を支配する主人となるとき自己の運命の主人になれ、世界の発展で決定的役割を果たすようになれば、自己の運命を切り開くうえに

も決定的な作用を及ぼすであろうことは当然でしょう。だからこそ、運命の謎を解くにあたってはまず、人間と世界との関係問題を考察することによって世界で人間が占める地位と役割はどのようなものかという問題から解き明かしていかなければならないのです。

そこでチュチェ思想は、人間と世界の関係問題、人間が世界で占める地位と役割にかんする問題を先に解明し、そうしたうえで人間の運命問題に照明を当てるのです。

金正日総書記は、「チュチェ哲学は、世界と人間との関係に関する問題、世界における人間の地位と役割に関する問題を哲学の根本問題として新たに提起し、人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定するという哲学的原理を明確にしたうえで、人間の運命開拓でもっとも正しい道を示しました」と述べています。

このようにチュチェ思想は、人類が哲学的思惟を始めたときから、久しい歳月不変の問題として論じられてきた物質が先か意識が先かという論点を超越し、人間の現実的な運命問題についての正しい認識にもとづいて哲学の根本問題を人間と世界との関係問題、世界における人間の地位と役割の問題へと画期的に方向を転換させたのです。

これは火の発見や地動説の確立より以上に重大な歴史的出来事だったと言えるでしょう。

人類が数千年間解決できなかった運命の謎を解く科学的土台は、このようにしてもたらされたのでした。

２　運命問題解決の鍵

運命の謎を解く問題、つまり人間と世界との関係問題を解明するには、まず、世界とは何であり、人間とはどのような存在かということから明らかにすべきでしょう。世界について無知であり、また人間についての理解が不十分であっては、両者の相互関係問題が正しく解明できるわけがありません。

世界とは何かという問題は、久しい歳月にわたる哲学思想の発展過程ですでに解明されました。

それは、世界は物質で統一されており、自らの客観的法則に従ってたえず変化発展するということです。この見解は、世界には超自然的な絶対者、神のような存在はなく、したがって人間の運命は固定不変なものではなく、変化しうるという認識を人びとに抱かせ

たという意味で価値があります。しかしこのような見解だけでは、人間の運命の主人は誰か、世界と人間との関係でどちらが支配的地位を占めるのかという運命開拓の原点問題までは解明できません。

この問題を解明するには、人間とはいかなる存在かという問題が明らかにされるべきです。

人間の本性は何か、人間は他の物質的存在とは根本的にどのように区別されるのか、を明らかにすることは、人間と世界との関係問題を科学的に解明し、人間の運命開拓のうえで持ち上がるすべての問題に正しい解答を与える鍵となります。

もちろんこれまで、人びとは自分自身を知るべく少なからぬ努力を傾けてきましたし、そうしたなかで人間についてのさまざまな見解が出されたのも事実です。

それらの見解はおよそ次の二つに絞ることができるでしょう。

一つは、人間を主として精神的な存在だと見ることとです。人間を純粋な精神的存在だと見る宗教的・観念論的見解は、人間はある神秘な超自然的存在の産物であり、その運命も超自然的存在によって決定されると主張します。このような見解は、搾取され抑圧され

る人間の境遇は避けられない宿命であり、かれらはただ与えられた運命に従うほかないと人びとを説得する反動的なものです。

人間についてのいま一つの理解は、人間を自然的・生物学的存在だと見るもので、自己保存の欲望、感性的本能のような生物学的ないし自然的属性こそ人間の本性であると主張します。意識を持って目的意識的に活動する人間と、本能に支配される生物学的存在との違いを区別できないこの見解もまた、弱肉強食の法則が支配する搾取社会の弁護に利用されました。

人間を神の創造物だと見たり低俗な動物的存在と見る、これら非科学的な反動的見解にとどめを刺したのはマルクス主義です。マルクス主義は初めて人間を社会的関係のなかで考察し、人間の本質は社会的諸関係の総体であると規定しました。これは、人間は社会を離れては人間たりえず、社会との関係のなかでのみ人間について正しい理解をもてるという、合理的な主張でした。

しかし、マルクス主義も、問題をさらに深めて社会的存在としての人間自体が持つ本質的特性にまでは立ち入ることなく、そこに留まってしまいました。

もちろん、以前にも、哲学者や思想家のなかには人間を、「思惟する存在」「話をする存在」「労働する存在」などと、人間のある一つの特性を挙げて規定しようとする試みもありました。しかしそれらは、人間活動のある一つの側面を指摘したものであって、人間を本質的かつ全体的に把握して定義したものではありません。こうして、人間の本質的特性は何か、という疑問は未知の問題として残されていたのです。

だから、ドイツの詩人ハイネが「ああ、人生の謎を解いておくれ！……　その謎を話しておくれ。人間とは何か、それはどこから来たのか、どこへ行くのか」と悩み、詩に詠んだことも、十分にうなずけることです。

チュチェ思想はこのように、人類の思想史に空白となって残されていたこの問題の解決を重要な課題とし、これに科学的な解答を与えたのでした。チュチェ思想が人間中心のすぐれた独特な哲学だとされる重要な理由の一つは、史上初めて人間の本質的特性についての完璧な解答を与えたことにあります。

人間の本質的特性というのは、人間のすべての活動に一貫していながらも、人間だけに備わる固有な根本的性質のことです。

金正日総書記は、「チュチェ思想は、人間を社会的関係のなかで考察し、その本質的特徴を新たに解明しました。チュチェ思想によって、人間は自主性、創造性、意識性をもった社会的存在であることが解明された結果、人間にたいする完璧な哲学的解明がなされることになりました」と述べています。

人間の本質的特性は、まず自主性です。自主性は世界と自己の運命の主人として、自主的に生き発展しようとする社会的人間の属性です。

現在、地球上には百五十万種に上る動物が生息していますが、これらの動物は、いずれも自然の環境に順応して生きるための活動をおこなっています。自然の一部分である動物にとっては、自然の環境に巧みに順応するのが生存の基本的な条件となるのです。

しかし人間の場合、その生き方はこれとは根本的に異なります。

人間は、自分をとりまく環境や条件に受動的に順応することなく、自然と社会のあらゆる束縛と従属から脱し、それらを自分たちに役立たせるようよりよく作り変え、活用することによって生存し発展する、世界にまたとない特出した存在です。

自然を対象とする人間の活動について見てみましょう。人間の使用するすべてのもの

はいずれも、自然の束縛から抜け出して豊かな物質生活をいとなもうとする人びとの要求から生まれた人間の労働の産物であり、そのために使われています。このように、労働は人間が自然の束縛から抜け出し、それを支配しながら生きていく活動だと言えます。

人間が自分を取り巻く環境の束縛から抜け出すための活動は、自然の改造ばかりでなく、社会改造の活動にも明確に現われます。

「自由のため戦場で死ぬことがあっても、仇敵を楽しませるために競技場で死んではならない」

これは、人びとが「偉大な奴隷の司令官」と尊敬して追憶するスパルタクスの言葉です。トラキア地方の自由民であったスパルタクスは、ローマ軍の侵略を受けた際捕らわれてグラディアトル（剣奴）にされた人物です。

剣奴たちは奴隷主を楽しませるため競技場で剣を持って仲間同士が殺し合う競技に狩り出されてたたかったのですが、これを運命として甘受していたかれらもやがて人間としての自分を自覚し、奴隷主に反抗する動きを見せはじめました。われわれが手にしている剣を、われわれ自身にではなく奴隷の運命を強いる奴隷主に向けよう、屈従の剣を闘争の

剣に変えよう、こう決心したスパルタクスは、二百名内外の剣奴たちとはかって秘密結社を結び、暴動を企てました。しかし暴動計画が露呈し、結局七十余名が脱出に成功して山にこもり、闘争の火ぶたを切ったのでした。

スパルタクスの奴隷暴動は、やがて鎮圧され、カプアからローマに至る道筋に暴動者六千名が磔になることで幕を閉じましたが、社会的束縛と従属の甘受を拒む奴隷たちの絶えることのない抗争はついに、数千年間存続した奴隷制度を崩壊に至らしめたのでした。

世界には自由を奪われ他人に束縛されて生きることを望む人はいません。この社会的に抑圧蹂躙され、自由を渇望する人たちのやむことを知らぬたたかいによって社会制度が交替し、歴史は前進してきたのです。

自然の束縛と社会的従属を振り切って周囲世界のすべてを自分たちに奉仕するよう作り変えていく人間のこうした本性が、ほかならぬ自主性なのです。

人間の活動に見られるその固有な性質は、たんに自主性だけではありません。

人間のいま一つの本質的特性は創造性です。創造性は目的意識的に世界を改造し、自己の運命を切り開いていく社会的人間の属性です。

人間の労働の形態は限りなく多様ですが、それらはいずれも既存のものを作り変えたり、以前にはなかった新しいものを作り出したりする活動だと言えます。

人びとがくりひろげる社会改造の活動も同じことです。社会改造の結果、以前にはなかった新しい政治・経済・文化関係が生まれ、人びとの社会的協力関係もいっそう強まります。

こうしてみると、自然と社会を改造する人間の活動はすべて、古いものを変革し新しいものを作り出しながら、世界を自分たちにいっそう有益かつ便利なものに変えていこうとする特性をもって進められていることがわかります。

太古の昔、原始人が住んでいた住居に比べると、現代人のそれはなんと大きく変化したことでしょうか。それでも人間は、今後、住宅内外の環境を自ら感知して事故要素を発見すれば適切な判断を下して自動的に保護、或いは修復するようなもっともっと住みよい家屋を建てようとしています。

このように、人間の活動にのみ見られる特性、古いものを変革し新しいものを作り出しながら、自然と社会を自分たちにより有益かつ便利に変えていく人間の本性を創造性と

言うのです。

人間の本質的特性のもう一つの重要な要素は意識性です。意識性は、世界と自分自身を把握し改造変革する一切の活動を規制する、社会的人間の属性です。

人間の活動は、自主的かつ創造的であり、しかも意識の規制のもとにおこなわれる目的意識的なものだというところに、その重要な特性があります。

人間は周囲世界の事物現象の本質と変化発展の合法則性、自分自身の要求と利害関係、変化する環境と条件などを把握し、そのうえで目的意識的に自己の活動をコントロールしながら活動します。世界とその運動発展の合法則性を把握し、自然と社会を自己の要求に即して改造し、発展させていく人間のこのような特性を意識性と言うのです。

このように自主性と創造性、意識性は、人間と動物を根本的に区別させる、人間の本質的特性をなすのです。

ここで一言強調したいことは、これら人間の本質的特性はもって生まれたものではなく、人間が社会的関係を結んで生き、発展する過程に身につける社会的な性質だということです。

一九二〇年にインドのコダムリ村付近の森で発見された「オオカミ少女カマラ」の話は広く世に知られていますが、生後六か月頃オオカミにさらわれ、八年もの間人間の世界と隔絶され、オオカミの群れのなかで育ったこの少女は、人間の肉体をもってうまれたものの、人間の社会で育たなかったばかりに自主的・創造的・意識的活動のかけらすら見せなかったそうです。

社会的関係を結んでいた人の場合も、人間の社会から孤立して長年独りぼっちですごせば、人間固有の姿を失うようになります。

このように、人間は社会的関係を結んでのみ生き、活動できる社会的存在であり、その自主性、創造性、意識性は自然が与えたものではなく、社会が与えた社会的属性なのです。

人間は自主性、創造性、意識性を本性とする社会的存在だということ、これがチュチェ思想が明らかにした人間にたいする新しくも完璧な科学的かつ哲学的理解です。

人間とはいかなる存在であるかが解明された結果、人間の運命の謎を解く鍵は人間の手に握られることになりました。

3　運命の主人

われわれは今や運命の謎を解く鍵を手にしたのですから、この鍵をもって人間の運命の主人は果たして誰かを解き明かしていくことができるようになりました。

運命問題解決の鍵を手にしたチュチェ思想は、運命の主人はほかならぬ人間自身だということを解き明かしました。

人間が自己の運命の主人となるのは、人間と世界との関係から見るとき、人間が世界の唯一の支配者、改造者だからです。

金正日総書記は、「自主性、創造性、意識性をもつ社会的存在である人間は、つまり世界唯一の支配者であり改造者です」と述べています。

人類の出現は、自然界から抜け出した、世界の特出した存在の誕生を意味し、周囲世界を自分たちに奉仕させようとする人間のたたかいは、早くもこのときから始まったのでした。

もちろん、人類の揺籃期に世界が人間に譲った支配領域はまことに微々たるものでした。それは、あたかも一枚の地図の上につけた鉛筆の一点よりも小さいものです。しかし人間は、絶え間ない活動によって一歩一歩世界の支配領域を広げてきました。

例えば物質的富の生産に要する動力の歴史が、このことをはっきりと語っています。最初人間に与えられた動力といえば、自分たち自身の肉体的な力だけでした。しかし人間は漸次、自然に属していた畜力、水力、風力のような動力を利用するようになったばかりか、今では原子力を支配する段階に至り、水素つまり重水素や超重水素などを燃料とする核融合反応炉の建設も目前のものとなりました。

資料によると、海水にはおよそ四十五兆トンもの重水素が含まれているといわれますが、これをもって核融合反応炉を稼動させることになれば、人類は百億年間動力エネルギーの心配をする必要がないというのが科学者たちの見解です。

いま一つの例を挙げてみましょう。

人間の生産活動に要する原料の採取範囲は、最初は地球の表面に限られ、それもきわめてわずかなものでした。しかし今日ではそれが数百メートルの地下や数千メートルの海

底は言うに及ばず、月世界にまで人間の手が伸びはじめています。

このように人間は有史以来わずか数千年間だけでも自然のこのように広い領域を支配するに至ったのですから、数千万、数億年の将来における支配領域がどのようなものかは想像すらできないでしょう。

そういうわけですから、人間が世界に支配されるのではなく、人間が世界を支配するというのは疑いのない事実なのです。

人間は、世界との関係において、世界を支配する地位を占めているだけでなく、それを改造発展させるうえに決定的な役割を果たします。

人間は客観世界の変化発展の法則を把握し、自らの要求に即して事物現象を主動的に改造していきます。

人間に卵と肉を提供する家鶏の祖先は、インドに生息する野鶏だといわれています。人間は五千年以上前にその飼育を始めたのですが、当時は一羽が年にわずか十個程度の卵しか産みませんでした。ところが今日では、二百〜三百個以上の卵を産むように改良されています。けれども自然の方は野鶏の改良で目につくほどの前進をもたらしていません。

そればかりではありません。生命科学分野では、遺伝子工学、細胞工学が目覚しく発展し、自然の力では到底不可能な新しい作物、たとえば茎にはトマトが、根にはジャガイモが実るような作物を作り出しています。

今日、人間はナノ技術を駆使して、これまで知られなかった全く新しい性質を有する物質を作り出そうとしています。周知のように、すべての元素の最小の微粒子は原子です。ナノ技術はこれらの原子の一つ一つを適切に結び合わせて今までになかった新しい物質を作り出すことを可能にしています。つまり人間は、今後決心次第で何でも作れるようになったのです。遠からず科学者たちは、ナノロボットが血管中に入り込んで、血管壁に付着した沈殿物を剥がし、細菌やヴィールスを攻撃し、癌細胞を探し出して治療することになろうと展望しています。

人間は自然ばかりでなく、社会も改造します。社会は原始社会から奴隷制社会、封建社会、資本主義社会を経て、今や社会主義社会へと発展しつつあります。このような発展は、自らなされたのでも、ある神秘な力によって進められたのでもありません。それらはすべて、人間の力によって、古い社会制度から新しい社会制度へと改められ、変革させら

れてきたのです。

実に、人間こそが世界を支配する主人、支配者であり、世界の発展で決定的な役割を果たす改造者なのです。

人間が世界の主人であり、世界の発展で決定的な役割を果たすという事実から、おのずと人間の運命の主人は自分自身のほかにはない、という結論が引き出されます。

世界を支配し改造する神秘な超自然的力が現実に存在しないからには、それが人間の運命を主宰すると考えるのは荒唐無稽です。また、現実の世界はすべて人間の支配を受け、人間によって改造される存在以上の何物でもないのですから、それも人間の運命を左右することはできません。ですから、人間は自己の運命を自己の手にして自ら開拓していく運命の主人になるほかないのです。

このようにチュチェ思想は、世界と人間との関係、世界で人間が占める地位と役割の問題を哲学の根本問題として提起し、自主性と創造性、意識性が人間の本質的な特性であることを独創的に解明したうえで、人間の運命の主人は人間自身であり、したがって人間は自分の運命を自らの力によってのみ切り開いていけるということを確証したのでした。

この偉大な真理の発見によって、久しい歳月神秘主義や宿命論のとりことなり超自然的な神の支配に甘んじてきた人間が、自己の運命の主人としての尊厳と価値を取り戻すことになったのです。

人間が自己の運命の主人であるという二つとない真理は、運命の開拓で持ち上がるすべての問題を正しく解決していくための貴重な鍵、出発点となりました。

二　運命開拓のプロセス

人間の運命開拓のプロセスは、骨の折れるマラソンのそれに似ています。マラソン選手が、肉体的精神的極限点を克服し最後まで走り続けて決勝点に到着するように、人間の運命開拓も一定の合法則的なプロセスを経てのみ最終ラインに到達できるのです。

したがって人間が運命開拓の道に踏み入るためには、まず、運命開拓のプロセスを見極め、そのうえで主動的かつ目的意識的に活動していくことが大切です。

このプロセスを正確に把握できれば、人間は自己の運命の主人としての地位を確保し、主人としての役割を全うしながら、わが運命を紆余曲折することなく、まっすぐに切り開いていけるのです。

人間の運命開拓の道を明示することを根本的な使命とするチュチェ思想は、運命開拓

の出発点にかんする問題ばかりでなく、運命開拓の合法則的プロセスにかんしても科学的な解明を与えています。

運命開拓の合法則的プロセスが明らかにされた結果、自己の運命の主人として自主的、創造的、意識的に生きつつ、自らの運命を切り開いていこうとする人間の前には、明るい未来が約束されることになりました。

1　運命開拓の主体

人間が自己の運命の主人であるとすれば、ある一個人が社会との関わりやその集団から離れて単独に自己の運命を開拓していけるであろうか、という問題も提起されることでしょう。

現在、人間の本質は、あるなんらかの集団に属さない、汝或いは我という、ここに今ある個人、つまり「実存」であるとするえせ哲学思潮も存在していますが、そのような単独の人間が何事かをやれると考えるのは大きな誤りです。

人間が自己の運命の主人だということは、自分以外のある神秘な存在が人間の運命を左右できないということであって、決して人間が集団を離れて単独に運命を切り開いていけるという意味ではありません。

そういうわけで、人間が自己の運命の主人であるという見解をより深く理解するためには、人間の運命を開拓していく実際の担当者、主体は誰かという問題を究めていくべきでしょう。

現実の人間は誰もが個別的にではなく、一定の社会的集団のなかで生き、活動しています。階級社会では、人びとはそれぞれ敵対する階級に別れて生きています。奴隷制社会では奴隷と奴隷主、封建社会では、農奴・農民と封建領主、資本主義社会では労働者階級と資本家階級とが、一口に言って働く人民大衆とかれらを搾取し支配する階級とが対立して生きています。このことから、運命開拓の担当者、主体は、勤労大衆かそれとも搾取階級かという問題の提起もなされます。

ところで現実的な社会的・歴史的過程を通してみるとき、運命開拓の担当者、主体は人民大衆です。

人民大衆はいずれの社会においても、社会構成員の絶対多数を占めます。人民大衆を抜きにした社会というものは考えられず、したがって社会・歴史の発展もありえません。

金日成主席は、「勤労人民大衆は歴史の主体であり、社会発展の原動力です」と述べています。

人民大衆が人間の運命開拓の有力な主人、主体であるというのは、たんにかれらが社会構成員の絶対多数を占めているためばかりではなく、かれらがすべての物質的・文化的富の創造者であるということとも関わっています。人間が生きるために利用するすべての物はもとより、世界のもっとも価値ある希少な財物もすべて、人民大衆の創造的労働の結果として生み出されたのです。

今日、世界七大不思議の第一とされているエジプトのピラミッドを考えてみましょう。

今に残るピラミッド中の最大のものは、紀元前二十八世紀に築造された第四王朝第二代王クフ（ギリシア名ケオプス）のもので、最大十六トン、平均二・五トンの切り石二百五十万個を積み上げて作られたものです。資料によるとエジプトでは百八十余のピラミッドが築造されたとありますが、その多くは戦渦や天災などで破壊され現在は八十程が残っ

ています。
このピラミッドの奇跡を生んだのは、ほかならぬ奴隷をはじめ勤労人民大衆の力と知恵でした。
人民大衆はその創造的労働で物質的・文化的富を作り出すばかりでなく先進的な思想家、すぐれた科学者、発明発見家、有能な文学芸術家を絶えることなく世に送り出し、社会的運動を力強くおし進めていきます。
万有引力の法則の発見は、必ずしもニュートン一人の功に帰せしめられるべきものではありません。
ニュートンはリンゴが木から落ちるのに注目して万有引力の存在を確認し、その法則を立てたのですが、これを実証するために、ケプラーの惑星の運動法則を万有引力の法則から誘導してみました。けれども万有引力の法則をただちに公表することははばかれました。そのわけは、法則の正しさは間違いないと確信していたものの、計算結果に一部合わないものがあったからです。それで論文の発表は十三年間も遅れることになりました。そのころ、ある科学者が地球の半径の新たな測定値を発表したのですが、この数値をとり入

れたところ、計算の誤差が解消されたのです。後日ニュートンは、自分が他の人たちよりはるか先を見通せたのは、巨人の肩の上に立っていたからだと意味深長に語りました。この言葉には、かれが科学的成功をおさめ得たのは、自分一個人の聡明によるのではなく、人類が達成した科学的諸成果の高峰に立っていたからだという意味がこもっています。

社会の発展も人民大衆を無視しては考えられません。

「話す道具」とされていた奴隷の相つぐ暴動は、すべての道がローマに通じていると豪語したローマ帝国の滅亡を促し、封建的圧政の下に苦しんでいた農奴・農民のたたかいは、フランス・ルイ十六世をギロチンにかけてブルジョア共和国を樹立させ、ロシアでは労働者、農民、兵士ら人民大衆の力によって反動的ツァーの専制統治が覆され、社会主義社会がうち立てられたのです。

フランス・パリのサン・オーギュスト広場の中央には、フランス人民が英雄視するジャンヌ・ダルクの銅像があります。

ジャンヌ・ダルクは、百年戦争でフランスが全領土をイギリス軍に占領される危機に陥ったとき、勇躍、救国の戦いの先頭に立った十六歳の羊飼いの少女でした。ジャンヌ・

ダルクら平凡な人民大衆が立ち上がって反侵略闘争を果敢にくりひろげた結果、フランスはイギリス軍を撃退することができたのでした。

このように自然を改造し社会を変革する主体は人民大衆であるがゆえに、人民大衆は当然運命の開拓でも主体になるのです。

では搾取階級の場合はどうなるのでしょうか。

もちろん搾取階級も生産に利害関係を持っていますが、それは自分に利益がある場合に限られています。搾取階級は自分の手で物質的富を作り出すことがなく、むしろそれを阻害することさえあります。蛍光灯が発明されたとき、白熱電球を生産していたアメリカの独占体は電球が売れなくなるとし、電力会社は蛍光灯の普及で電力の需要が減るとして、両独占体は、蛍光灯の生産制限契約を結んだとのことです。

反動的搾取階級はまた、人民の創造的な力を自分たちの「権威」を上げ、あるいは変態的享楽の必要に少なからず振り向けて自然と社会の改造を遅らせています。先に見たピラミッドもエジプトの歴代王が「来世」の永遠な幸福を願って数十万の奴隷を何十年も働かせて築造したのでした。

また、反動的搾取階級は自分たちの特権的地位を覆す搾取社会の変革を必死になって妨げ、人民大衆の革命闘争の弾圧に狂奔するのが常です。古今東西の歴史は、ネロやシーザー、ヒトラー、ムソリーニのように社会改革を求める人民大衆のたたかいを凶悪な暴力で、時には狡猾な懐柔と欺瞞策で弾圧抹殺した例を数限りなく記録しています。このことは、搾取階級は時代の前進を阻み、逆戻りさせようとする歴史の反動だということを語っています。

では、個人の場合はどうでしょうか。

歴史を発展させる上で個人の役割を無視するのは誤りですが、個人がその実力を大いに発揮できるのは、かれが人民大衆の一構成員として、人民大衆の力で歴史的に蓄積された経験と知恵のすべてをうけ継ぎ、人民大衆と一丸となってたたかう場合だけです。

歴史と現実は、人間の運命を切り開くたたかいの主体は、ひとり人民大衆のみであると語っています。

今日、人民大衆は国家・民族という社会的集団をなして、自己の運命を切り開くたたかいをくりひろげています。つまり国家・民族は人民大衆の運命開拓の基本的な単位です。

そのようなわけで自己の運命の開拓に向けた人民大衆のたたかいは、国家・民族の運命開拓のたたかいとして具体化され、国家・民族の運命とともに人民大衆の運命も個人の運命も開拓されていくのです。

人民大衆の運命が国家・民族を単位にして開拓されていく条件のもとで、個々の国家・民族の運命を切り開く主体はそれぞれの国の人民大衆にほかなりません。自己の国家・民族の運命を他国人が代わって開拓してくれることなど決してありえません。

一九三六～一九三九年のスペイン国内戦争の教訓がこのことをはっきりと語っています。

当時、スペイン革命の支援に五十四か国から三万五千余の人たちが駆けつけました。かれらは七個の国際旅団を編成してマドリード、バロセロナをはじめ大都市防衛戦で英雄的にたたかいました。ほかにもスペイン革命を物心両面から支援した人たちの数は百余万に達していました。

しかし、スペイン人民戦線は革命の獲得物を守ることができなかったのです。原因は、国際的支援が弱かったからではなく、スペイン人民の多くが自己の運命の主体として準備されておらず、主人の役割もまともに果たせなかったからでした。

社会・歴史の主体、運命開拓の主人は、国家・民族を単位とする人民大衆です。個人は人民大衆の一構成員として自然と社会を改造するたたかいに積極的に参加することによってのみ、自己の運命の真の主人になれるのです。

2　運命開拓の方向

人民大衆が運命開拓の担当者、主体であるなら、かれらのめざす運命開拓はどういう方向をとって進められるのでしょうか?

大地に降る一粒一粒の雨滴が作る数千、数万の細流は、次第に合流していくつもの小川となり、それらはやがて大河となって広い海へ注がれて行きます。

人間の運命開拓のプロセスにも、このような一定の方向性があります。それがなければ人間の運命開拓のプロセスは、灯台を見失い風浪にもまれながらあてどもなく漂流する小舟のそれとたいした違いはないでしょう。

金日成主席は、「支配と従属がなく、侵略と戦争のない、自由で平和な世界でともに

幸せに暮らすのは、自主的人間の社会的本性に根ざす人類の理想であり、こうした新世界に向かって進むのは歴史発展の基本的方向です」と述べています。

運命の開拓は、分かり易く言って、人間がその根本的な志向・要求を実現させていくことだと言えます。

では、人間の根本的な志向・要求は何でしょうか。それは自然と社会の束縛と従属から抜け出し、自由で幸福に生きることを志向する自主的な要求です。

上述したように、人間の本質的特性の一つは自主性であり、それは社会的存在である人間の生命をなす根本的な属性です。人間が自主性を喪失して他人に従属し、踏みにじられながら生きるならば、そのような人間は、肉体的には生きていても、社会的存在としては屍と変わりありません。人間の創造性と意識性の発現も、結局は自主性の実現を助けるためのものなのです。古今東西の歴史をひもとくと、圧制と抑圧に抗し、わが生命をためらいなく捧げてたたかった闘士たちを数限りなく見出すことができますが、それは、かれらが肉体的生命よりも自主性を重んじていたからです。

人間の生命である自主性のゆえに持つことになる要求が自主的要求であり、人間のす

べての活動の基礎には、ほかならぬこの自主的要求があるのです。

もちろん人びとの境遇はまちまちであるため、かれらの要求の具体的な内容は各人各様でしょう。しかし、それらはみなになにものにも束縛されず自由に、主人として生きようとして持ち出されているという点で根本的に共通しています。この要求の根本的共通性によってかれらの運命開拓の道は一つにまとまり大河となって、自主的要求の実現方向へと流れていくのです。

では、人間の自主的要求実現の方向へ流れてゆく運命の大河、歴史の大河の終着点はどこでしょうか。

ここではまず人びとの社会的境遇と生活状態、その前途がかれらが占める社会的な地位と役割によって規定されるということに注意を向けるべきです。社会において主人の地位を占め、主人としての役割を全うしている人は、自己の運命の主人として自らの意思と要求に即して運命を開いていくことができますが、社会で主人の地位を占めることができないと、他人の支配を受け、搾取されるみじめな境遇に甘んずるほかないのです。

ところで、社会における人間の地位と役割は、社会全般にたいする政治的支配権であ

る国家権力と生産手段の所有関係によって規定されるのですから、運命開拓のプロセスは、当然、人民大衆が国家権力と生産手段を掌握する社会制度の樹立方向へ向けて流れていくことになるのです。

国家権力と生産手段の主人になれなければ人民大衆は自主的な生活を享受できず、自分たちの運命をまともに開拓していくことができません。

フランスの進歩的ロマン主義作家ヴィクトル・ユゴーが一八六二年に著した長編小説『レ・ミゼラブル』は、フランス進歩的ロマンチシズムの思想的・芸術的特徴を集大成し、ヨーロッパ文学の発展に大きく寄与した作品として広く知られています。レ・ミゼラブルという語はみじめな人たちという意味です。小説は題名が語っているように、飢えている幼い甥たちのために一片のパンを盗んだばかりに十九年間獄につながれ、出獄後もかずかずの苦難を経る主人公ジャン・ヴァルジャンと、わが子を育て、口に糊するために、髪を売り、歯を売り、ついには身を売り、あげくの果てに非業の死をとげたファンティーヌをはじめ搾取社会でみじめに生きる人たちの苦痛と涙ぐましい生きざまを生き生きと画き出しています。小説を読んで誰もが階級社会で国家権力や生産手段に無縁の働く人たちに

あてがわれるのは、貧窮と無権利だけだということをいまさらのように感じたことでしょう。今日も資本主義社会において絶対多数の働く人民大衆は、依然として政治的権利を持てず、物質的生産手段、商品として売買される労働力の持ち主、とるにたりない存在として扱われています。

とりわけ国権を侵略者に奪われた植民地人民の境遇は、あまりにも悲惨です。朝鮮は四十年間、日本帝国主義の植民地支配を受けましたが、その間、百余万名にのぼる人民が罪もなく殺され、なかでも日本が中日戦争を起こした一九三八年から一九四五年までの七年間に八百四十万余の青壮年が徴兵・徴用の名で戦場や強制労働に狩り出され、二十万名のうら若い女性が日本軍「慰安婦」として性奴隷の生活を強要され、殺害されました。当時朝鮮の人口は二千万人ほどだったのですから、上の数字から日本帝国主義支配下にあった朝鮮人民の境遇がいかにみじめなものであったかが推しはかれましょう。

アフリカの植民地人民の状態も同様でした。西アフリカの奴隷海岸には今も、ヨーロッパの奴隷商人がアフリカの人民を獣のように狩猟して監禁した多くの倉庫が残されています。黒人学者デュボスの計算によると欧米植民主義者がアフリカで捕らえまたは殺害

した黒人奴隷の数は、一億名にものぼるそうです。亡国の民は喪家の犬にも劣るという古い格言は決していわれのない言葉ではありません。

このことから考えても、運命の開拓をめざす人民大衆のたたかいの歴史は、必然的にかれらが国家権力と生産手段の主人となる社会制度の樹立に向けて進んでいることが理解できるでしょう。

人民大衆が国家権力と生産手段の主人となり、その自主的要求を真に実現することになる社会は社会主義社会です。社会主義社会は、国家権力と生産手段が人民大衆の手に握られているという点で、それ以前の他のすべての社会と根本的に区別されます。

社会主義社会では、人民大衆が国家権力と生産手段の主人となっているため、搾取と抑圧は完全になくなり、誰もがみな平等の地位を占め、全社会が「一人はみんなのために、みんなは一人のために」というスローガンのもと、互いに助け導く同志的関係が支配する一つの家族、一つの家庭となります。そこには、社会全体の利益と個人の利益が調和よく結ばれ、個々の社会構成員が自己の才能に応じて限りなく発展していける広びろとした道が開かれています。

生産の直接の担当者である人民大衆が、国家主権の主人、生産手段の主人となっている社会主義社会では、生産力発展の道は無限に開かれており、そこではすべての社会構成員が自主的かつ創造的な生活を心ゆくまで享受しうる物質的条件が十分にととのうことになりましょう。

このことは、社会主義社会が束縛と従属の一切ない、幸福を願う人たちの自主的要求がりっぱに実現した社会、誰もがみな平等な主人としていずれ劣らず豊かに生きたいと願う人間の世紀的念願が現実として花咲く理想社会であることを物語っています。

今日、人類が社会主義を希望の灯として、力強く前進していることは決していわれのないことではありません。

ジンバブエのムガベ大統領は、帝国主義者の恐喝や懐柔にもめげず、自国人民は社会主義の道へ進むであろうと確言しました。アメリカがアフリカ大陸における「西欧式民主主義」の「すぐれた標本」として広告していたベニンで今や社会主義をめざすベニン建設労働党が広範な大衆の支持を受け、同じくウガンダやケニアでも西欧式政治方式が排される事態が生じています。

アメリカの「静かな裏庭」とされていたラテンアメリカでも、社会主義の炎が激しく燃えさかっています。キューバ人民は前世紀六〇年代に選択した社会主義の道を確固と前進しており、ベネズエラもアメリカの干渉と圧力を退けて社会主義の道を選択しました。社会主義の建設で挫折した国々でも、今社会主義再生運動が力強くくりひろげられています。

人民大衆を主体とする運命開拓の流れが、人間の自主性の実現に向かい、社会主義社会を建設し発展させる方向へと進むのは、きのうもきょうも変わらぬ人類史の不変の流れです。

3　運命開拓の方式

人間の運命開拓の基本的な目標は人間の自主的要求の実現にありますが、これは決しておのずとなされるのではなく、一定の活動方式を通してのみ達成できるのです。人間の自主的要求の実現方式は、つまるところ人間の運命開拓の方式だと言えます。

チュチェ思想は、人間の自主的要求を実現する運命の開拓は自然と社会を目的意識的

に改造していく人間の創造的活動を通してのみなされるということを明らかにしています。このことは創造的な活動方式がほかならぬ人間の運命開拓の基本的な方式であることを示したものです。

金正日総書記は、「自主的な生活をめざす人民大衆の活動は創造的性格をおびます。人間は自己の生活上の要求を創造的活動をつうじて実現していくのです」と述べています。

人間の自主的要求を充足させるうえに必要なものは、初めから自然のなかにそのまま備わっているのではありません。この世には金のなる木や打ち出の小槌のようなものがあるわけでなく、人びとの精神的・文化的要求を充足させる文学芸術作品を贈ってくれる女神もいるはずがありません。

それに、人間の自主的要求には上限がありません。身分不相応な生活を望むのは虚栄でしょうが、生活の向上に伴って自主的要求がひきつづき高まるのは当然の成り行きで、きょうは満足すべきものでもあすは時代後れとなるのは普遍的な現象です。

ですから、人間は自主的要求を実現し、運命を開拓していく道程で、たえず古いもの

を捨て、新しいものを作り出していくことになるのです。

これは否定できない事実です。自然も社会も自己の客観的法則をもって変化発展します。水は一気圧のもとでは摂氏百度で間違いなく沸騰します。客観世界の事物現象のこのような特性を正確に把握していれば、人間はそれらを自らの要求に即して改造し変革していけるのです。

とりわけ、事物現象の本質とその変化発展の法則を把握する人間の創造的能力と科学技術知識は、たえず新しいものを作り出していく直接的かつ決定的な要因として作用します。人間は、この創造的能力と科学技術知識に依拠して事物現象の構造や形態、性質、機能などを自己の要求通りに改造し変革していきます。

人間はこのような創造的活動を通して自らの自主的要求を実現し、運命を開拓していくのです。ところで、ここで言う人間の創造的活動とは、運命開拓の主体であり、創造の主体でもある人民大衆の創造的な活動をさして言う言葉です。

人民大衆の創造的活動がその自主的要求を実現する運命開拓の方式となるのは、人類の久しい歴史が確証しています。

人類の歴史は、運命の開拓をはかる人民大衆の創造の歴史だと言えます。

いずれの社会においても、人間の生活に資する財貨は、そのどれもが人民大衆の創造的労働によって作り出されています。彼らの創造的活動によって労働用具が不断に改善され、それに伴って財貨の生産が拡大し自然環境は人間に有益な方向へと変えられているのです。社会の改造も同様です。新しいものを志向する人民大衆のたえざるたたかいによって社会制度の交替がくりかえされ、今や搾取のない先進的社会制度の出現を見るに至り、社会関係は人間の本性的要求を反映した方向へと改められつつあります。

ところで、人間の運命開拓の基本的な方式である創造は、決してたやすくなされるのではありません。それはいつの場合も闘争を伴います。闘争のない創造というものは考えられません。

資本主義発生初期の十六世紀から十九世紀初めにいたる歴史的時代に、搾取や抑圧など社会的不平等を生む私的所有制をなくして社会的所有にもとづく平等な社会の樹立を主張する一連の思想家が現われましたが、かれらは空想的社会主義者と呼ばれています。それは、かれらの理想が実現不能な空想にすぎなかったからです。かれらはおしなべて搾

取階級の「善意」に訴えて理想を実現しようと考えたのでした。
　例えばフランスの空想的社会主義者フーリエは、都市と農村の対立がなく、誰もが自分の趣味と能力にかなう仕事を自由に選択でき、「友愛以外にいかなる連帯もない自発的な連合」という意味の共産主義的協同組織「ファランジュ」を構想し、その設立に必要な百万フランの資金を調達するため有産者たちにアピールする宣言文を発表しました。そして、数年の間資金集めに奔走したのですが、結局むだに終わりました。彼は指定の日時にはどんなにせわしくても必ず帰宅して、応募者が現われるのを夜遅くまでむなしく待った、というエピソードもあります。しかし、貪欲な搾取階級に「善意」や「慈悲」を期待したことがどだい無理な試みだったのです。歴史には、どの搾取階級であれ、自ら進んで特権的地位を譲った例は記録されていません。
　搾取と抑圧のない、全人民が自由平等に生きる人類の理想社会は、搾取階級の「善意」によってではなく階級的対立を一掃する社会主義革命を通じてのみ到来するということは歴史の語る必然です。
　自然の改造活動も同様です。周知のように人類の福祉に寄与した有意義な発明発見は

概して非常な苦心の末に達成されています。人類が自然征服の創造的活動で収めた一つ一つの成果には、自然の秘密を解き明かし、その盲目的な力を人間に奉仕させるべく傾けた無数の人たちの血のにじむような努力がこもっています。だから自然改造は自然とのたたかいだとも言われているのです。

それに自然の征服に向けた人民の創造的活動は、反動的搾取階級の利益に反する場合がしばしばあり、そのために大きな試練に遭遇する事例も少なくありません。それは、文明時代と呼ばれる今日でも見られます。億万長者の利害関係によって、人びとの創造的努力の結実が闇から闇に葬られ、あるいは人間の生存と発展を脅かす手段として悪用されてもいます。

そういうわけで、運命開拓の基本的方式である創造は闘争を伴うのです。闘争を伴う創造を通じてのみ人民大衆の自主的要求は正しく実現できるといえます。

運命開拓の基本的な方式としての創造は、客観世界の事物現象を改造し変革するばかりでなく、創造の主体である人民大衆をより有力な存在に作り変えていく過程を伴い、そうしたなかで人間の創造的活動はより高いレベルへと不断に高まっていくのです。

学者たちは、二十一世紀における科学技術上の成果についていろいろと予測していいます。そのいくつかを紹介してみましょう。

―二〇一八年には、科学の研究にたずさわる人工頭脳が出現するであろう。

―二〇三〇年には、人間の姿をしたアインシュタインに劣らぬ知能を持つロボットが出現するであろう。

―二〇五〇年には月に地球村が建設され、火星実験室の建設も進むであろう。

一昔前は想象すらできなかったこれら驚くべき予測は、もはや実現不能なものではない近い未来の現実です。人民大衆が世界改造変革のたたかいに取り組み、創造的能力をたえず高めて自らをより有力な創造的存在に作り変えている現実からして、これらの目標は間違いなく達成されるでしょう。

以上見てきたように、自主的要求の実現に向けた人民大衆の創造的活動方式は、人間の運命の開拓を確実に裏打ちしているのです。

4　運命開拓の推進力

人間の運命開拓のプロセスは複雑を極めていますが、そこにはさまざまな要因が作用します。そのいくつかの主な例をあげると、客観的要因には自然地理的条件と物質的・技術的手段があり、主体的な要因には人間の身体的能力と知識および思想・精神があります。

これら諸要因のなかで基本をなすのは何か、何が運命開拓の窮極的かつ決定的な推進力になるのかを明らかにすることは、運命問題の解決にあたって持ち上がるいま一つの重要な課題となりましょう。

有利な自然地理的条件や近代的な物質的・技術的手段は、運命の開拓で重要な働きをします。また健全な体力と深くて広い科学技術の所有者は運命の開拓を有利に進めることができましょう。

しかし、それらは運命開拓の窮極的かつ決定的な推進力、要因ではありません。その推進力の要因は人間の思想意識です。これなしにはいかに有利な自然地理的条件や近代的

な物質的・技術的手段が備わっていても、それぞれの力を十全に発揮させられず、健全な体力や豊富な知識も大して用をなさないのです。

ここで、中国の文学者魯迅が『阿Q正伝』を著わした動機について振り返ってみましょう。

一九〇二年日本に留学し、医学を学んでいたかれは、軍国主義と偏狭な国粋主義にかぶれた日本人学生たちが自分たち中国人学生を「チャンコロ」呼ばわりし、ばかにするのをしばしば体験しました。

そんなある日、生物学実習の終わりの時間に日露戦争関係の幻灯を見せられたのですが、そのことでかれのうっ憤は絶頂に達しました。と言うのは、針金で縛られた一中国人が日本の秘密を内偵するツァーロシアのスパイだとされ、一言も抗弁できず残酷に首をはねられる場面があったのです。画面には無表情にそれを見物している大勢の中国人の様子も映し出されました。

そんな場面をみながらも楽しそうにはしゃいでいるまわりの留学生たち。……魯迅にとってそれは大きなショックでした。眠りから覚めなければならない。いかに壮健な身

体を持っていてもそれがなんになろうか。医術は病気の体は治せても病める精神は治せない。……　こう考えた魯迅は文学の創作をもって中華民族の精神を目覚めさせようと思い立ったのでした。『阿Q正伝』はそうした魯迅の思想の反映として生まれた作品中の一つだったのです。

喧嘩に負けても「精神勝利法」で自分が勝ったとからいばりする阿Qの否定的形象は、中国民族を冒瀆するものだとする激しい批判と排撃を一部の人から受けはしましたが、かれの作品は民族の覚醒を促すうえに大きな作用をしました。

人間の生活・行動はその思想に左右されます。奴隷的思想の持ち主は、奴隷の境遇に陥ってもそこになんらの疑義もはさまず、正常な生活として受け入れるでしょうから、かれらの受け継いだ悠久な歴史やすぐれた文化伝統もたちまちのうちに色あせてしまいましょう。

思想意識は事物現象にたいする人間の要求と利害関係を反映した意識です。人間の意識には、客観的事物現象の本質とその変化発展の合法則性ばかりでなく、事物現象との関係のなかで生ずる人間自身の要求と利害関係も反映されるものです。この事物現象にたい

する自分自身の要求と利害関係を反映した意識を思想意識と言います。
まったく同じ事物現象が、ある人にとっては有利であり、他のある人にとっては有害だという場合はよくあることです。たとえば、人民大衆は戦争を望まないが、軍需独占体はどこかで戦争が起きることを望んでいます。このように、事物現象にたいする人びとの要求と利害関係を反映した思想意識は、人間の活動を左右する決定的な要因となります。人間の行動はおしなべて、生活上の要求ないし利害関係の実現に向けてなされるものですから、必然的にその思想意識によって規制されるのです。
ところで、人間の活動を規制する要因は、すべて直接的にではなく彼の思想意識を通じて間接的に作用します。ですから、思想意識が同じでないと、それが人びとの行動におよぼす影響はそれぞれ違ったものになります。
しっかりした思想意識の持ち主は大きな試練や困難を前にしてもくじけることなくそれを克服していきますが、そうでない人はたやすく挫折するものです。さる朝鮮戦争に例をとって見てみましょう。
一九五〇年六月に始まった三年間にわたる朝鮮戦争は、朝鮮人民が再び植民地奴隷に

転落するか、それとも自主的人民として生きるかを決する、運命をかけた苛烈な戦いでした。

朝鮮人民が相手にしたアメリカは、建国後百数十年間に百十四回もの侵略戦争を起こして、領土を十倍以上に拡大し、支配下に入れた国家・民族の搾取収奪によって肥大化し、第二次大戦後は帝国主義の旗頭として世界に君臨した国でした。そのアメリカがこの戦争に、最新兵器で装備した自国陸軍の三分の一、空軍の五分の一、太平洋艦隊の大半、それに十五追随国の軍隊と南朝鮮かいらい軍、さらには旧日本軍将兵まで含むおよそ二百余万の兵力を投入したのです。ここでかれらは、太平洋戦争で消耗した十一倍（七千三百万トン以上）もの軍用物質をつぎこんだのですが、その軍事費は、直接費百五十億ドル、間接費は実に千五百億ドルにものぼりました。

一方朝鮮は、日本の植民地支配から解放されて五年、正規軍の建設後わずか二年にしてこのアメリカの侵略を受けることになったのです。経済的潜在力もほとんどなく、兵器も脆弱なものでした。このような朝鮮が帝国主義強大国アメリカを相手に現代戦を戦い抜けるなど誰が想像しえたでしょうか？

しかし、一九五三年七月二十七日、「世界最強」を誇るアメリカ帝国主義侵略者が戦争を引き起こしたその線上にへたばりこみ、英雄的朝鮮人民の前に膝を屈したのです。この日午前十時、くたびれた野戦服をまとったアメリカ側首席代表は調印室に力なく座り、国連旗と並んで立てられた朝鮮民主主義人民共和国の国旗の前で、敗北を認める休戦協定調印文にサインをしたのでした。第二次世界大戦の最終段階に、フローレンスでイタリア駐屯ドイツ軍とムソリーニ軍を降伏させた前歴を誇り、朝鮮でも同じような「軍功」を挙げようと意気込んだ米極東軍司令官兼「国連軍」司令官クラークは、休戦協定文の調印後、「わたしは政府の指示を遂行することで、勝利のない休戦に調印した史上最初の米軍司令官というかんばしくない名を得た」と慨嘆したものです。

休戦協定の調印は、朝鮮人民に膝を屈したアメリカをはじめとする世界帝国主義連合勢力の敗北でした。

ではこの領土と人口も、また軍事技術的にも経済的にも比べようもなく弱小な朝鮮が、強大なアメリカ帝国主義を屈服させることのできた理由はどこにあるのでしょうか。それは何か有利な客観的条件や外部の支援にあったのではなく、自己の運命の主人として二度

と再び帝国主義者の奴隷になることを潔しとしなかった朝鮮人民の決死の思想的覚悟にあったのです。

では、運命の主人としての人民大衆が抱くべき思想意識とはどのようなものでしょうか。先にも述べたように思想意識は人によって異なります。端的に言って、そこには自己の運命の主人として生きようとする思想・精神もあれば、奴隷的屈従思想もあり、帝国主義者の狂信的な侵略思想のようなものもあります。

金正日総書記は、「人民が自己の運命の主人として体得すべき思想・意識は、自主的な思想・意識です」と述べています。

自主的な思想意識は、自己の運命の主人としての自覚であり、自己の運命を自ら開拓しようとする意思です。自己の運命の主人としての自覚は、自己の運命の主人は自分自身であり、自己の運命を開拓する力もまた自分自身にあるという確固とした認識であり、自己の運命を自ら開拓しようとする意思は、自己の運命はあくまでも独力で開拓していこうとする強い覚悟・決心であり、不屈の闘争精神です。

昔から、おのれを知れば強者になり、おのれを知らなければ弱者になると言われてい

ます。自主的な思想意識は、自分たちの誇りある幸福な生活は自身の努力にかかっており、その力も自分たちにあるということを自覚させ、人びとを運命の開拓に奮い立たせる原動力となります。

金日成主席によって展開された朝鮮人民の抗日武装闘争期のある一齣をここに紹介しましょう。

抗日武装闘争は、日本帝国主義侵略軍と遊撃隊とのたんなる軍事的対決ではなく、東洋の「盟主」を自称する日本帝国主義の「皇道精神」と、国家・民族の自主権の回復をはかる朝鮮の愛国的遊撃隊員たちの自主独立精神との思想的精神的対決でもありました。

抗日遊撃隊結成後間もない一九三二年の冬、北満州遠征からの帰途、主席の率いる十八名の遊撃隊員は、羅子溝の台地で日本軍「討伐隊」の包囲を突破する苦しい行軍を続けていました。空からは投降を促すビラが撒かれ、それに北満州の酷寒と腰までつかる大雪、かろうじて蓄えた食糧は底をつき、身にまとっているのは裂けて肌がのぞいている夏用軍服というありさまで、羅子溝の名も知れぬ尾根を彷徨する隊員はいずれも二十歳にもみたぬ若者たちでした。

革命とはこんなにも困難なものか。武器を取って二、三年もすれば容易に決着がつくだろうと思った革命が、こんなにも険しい断崖絶壁のきわに追いつめられてしまったというのか。……

金日成主席はこの生死の岐路に立った当時のことを顧みて、回顧録『世紀とともに』でこう述懐しています。

「あの冬、われわれが羅子溝の奥地で飢え死にも凍え死にもせず、銃弾を浴びて死ぬようなこともなかったのは、奇跡中の奇跡だったといえる。わたしはいまでも、あの試練のなかからわれわれを立ち上がらせた力がなんであり、われわれを敗北者や落伍者ではなく、勝利者として抗日の旗をかかげさせた力がなんであったかを自問してみるときがある。そしてそのたびに、『それは革命にたいする責任感からだった』と誇らしく自分に言い聞かせている。（中略）わたしはあのとき、われわれが挫けてしまえば朝鮮は蘇生できないということを肝に銘じていた。われわれが死んでも朝鮮を救う人間がほかにいると考えたなら、われわれは羅子溝台地の雪崩に埋もれて、二度と立ち上がれなかったであろう」

きびしい試練に打ち勝ち勝利してきた朝鮮革命の歴史的過程が残した貴重な真理は、

自主的な思想意識で武装した人間だけが運命開拓のたたかいで、強靭な意志をもって不屈の闘争力を発揮し、あらゆる試練を耐え抜いてわが運命を開拓していけるということをわれわれに教えています。

このように自主的な思想意識こそ、人民大衆が主人となってくりひろげる運命開拓のたたかいをおし進める強力な推進力なのです。

三　運命開拓の根本的方途

地下の鉄鉱物を掘り出して機械を作るためには、地中の鉱床の存在をつきとめるだけでなく、採掘・製法にかんする知識・手段がなければなりません。たとえ月世界に有用鉱物が大量に埋蔵されていても、その利用法を知らなければ無用の長物にすぎません。

人間の運命開拓も同様です。

自己の運命の主人は自分自身であることを知り、開拓のプロセスまで把握できていても、正しい方途に欠けていれば、その道程は紆余曲折を免れません。

人間の運命開拓のこの根本的な方途は、チュチェ思想によって完璧な科学的解明を得ています。

1　自主の原則で

人間がわが運命を正しく開拓していくには、なによりも自主の原則を堅持しなければなりません。

金正日総書記は、「チュチェ思想は、人間が世界において主人の地位をしめ、世界の発展と人間の運命開拓において決定的役割を果たすという哲学的原理から出発し、つねに人間を中心にすえ、すべてのことに自主的に対応し、人間の地位と役割の向上に寄与するよう、創造的に活動することを要求します」と指摘しています。

運命の開拓で自主の原則を堅持するというのは、運命の開拓上持ち上がるすべての問題を自分の利益にあわせ、独自の判断と決心により、自力で解決していくことを鉄則とするということです。独自性と自力更生を基本的内容とする自主の原則を堅持できなければ、人民大衆は国家・民族の運命の開拓で主人の地位を守ることができません。

運命の開拓における自主の原則は、具体的には思想における主体、政治における自主、

経済における自立、国防における自衛によって具現されます。

思想における主体は、他人への依存心を捨てて運命の主人としての権利を行使し、責任を全うするという観点を堅持することであり、政治における自主は、外国勢力の支配や干渉を許さず国家・民族の独立・自主権と人民の利益を守り、人民の力に依拠して政治をおこなうことです。経済における自立は、人民の物質的需要を基本的に自力で充足する独り歩きの経済、つまり多面的に発展した自立的民族経済を建設することであり、国防における自衛は、自力で国を防衛することです。

自主の原則を貫くには、なによりもまず思想における主体性を確立すべきです。

金日成主席は、人が事大主義に染まれば愚か者になり、民族が事大主義に陥れば国が滅び、党が事大主義に走れば革命が台無しになると教えています。この指摘には、すべての問題をつねに自らの信念をもって自分の頭で考え、独自の方式で決定すべきだという深い意味がこもっています。

主席のこの指摘がいかに正しいものであるかは、旧東欧社会主義のあまりにももろい崩壊を通しても確証できます。

旧東欧社会主義諸国の指導者たちは、定見がなく大国に依存し、かれらの言いなりに対内外政策を立てたものでした。その事大主義・教条主義が目にあまり、巷間では「モスクワで雨が降ったら、ベルリンで雨が降らなくても傘をさして歩く」とあざ笑う言葉がはやったほどでした。他人の精神を持ち、他人の笛に踊っていた旧東欧社会主義諸国は、「長兄」ソ連の崩壊を前後して枕を並べてついえ去ってしまったのです。

思想における主体はこのように重要です。これなくして自主の原則をうんぬんすることは考えられず、自らが主人となって運命を開拓していくこともできません。

政治は社会生活で決定的な意義を持つ分野です。自主の原則を守るには、政治においてそれが貫かれなければなりません。

国家・民族の運命はその国の政治のあり方にかかっています。進歩的な人民的政治は国家・民族の尊厳と富強繁栄、明るい未来を約束しますが、反動的政治は国家・民族の運命を損ないます。

人民大衆の運命の開拓は、国家・民族を単位に、それぞれ異なる環境・条件の下で進められているわけですから、その正しい政治はそれぞれ独自の自主的な政治とならざるを

得ません。さもないと、内政干渉をこととする外国勢力の支配主義的策動によって政治的自主権を奪われ、自主独立国家としての尊厳を守れなくなります。政治的自主性を喪失した国の人民は、自己の政権とは名ばかりのもので、結局は現代版植民地奴隷の境遇に甘んずるほかならなくなるのです。

「経済大国」を自任する日本を指して世界の人びとが「政治こびと」と嘲笑していますが、これは自主性不在の政治的現実にたいする当然の評価だといえましょう。日本政府は、沖縄の普天間米空軍基地の移設問題でアメリカの圧力に屈して国民にたいする公約を反故にし、世の笑いぐさとなっています。このような自主性のない政治がもたらすものは、奴隷の境遇以外の何物でもありません。

政治における自主はつまるところ政治的自主性であり、それが国家・民族と人民大衆の運命開拓にとっていささかの譲歩も許されない生命に等しいものであるということは、世界政治史の経験と教訓によって明白に確認されています。

経済は社会生活の物質的基礎をなす分野です。経済的自立なしに自主の原則を論ずることはできません。

他国への経済的従属はわが生命を他人に委ねるようなものです。他人の袖にすがって生きる人間は根性が卑しくなり、借財がかさめば下人生活を余儀なくされるのが世の常です。いかなる国家・民族も他国の援助にすがって生きることになれば、そこには政治的付帯条件がつきまとい、経済のみならず政治的にも援助国に従属するほかなくなります。

経済的自立が国家・民族と人民大衆の運命開拓上いかに重要であるかは、コメコン（ソ連および東欧社会主義諸国間の経済相互援助会議）への朝鮮加入強要問題を通してもよく知ることができます。一時、社会主義諸国内に台頭した現代修正主義者・大国主義者たちは、民族国家単位に運命開拓の道を進むべき人民大衆の根本的要求を無視し、いわゆる「国際的分業」と「統合経済」の理論を振りかざして社会主義国家はすべてコメコンに加入すべきだとしました。朝鮮も社会主義建設の途についたばかりの頃、かれらから強い圧力を加えられました。

しかし、ヨーロッパ社会主義諸国と経済的格差の大きかった朝鮮が経済の命脈を大国に握られて、石炭や金銀のような鉱物資源を提供して生活用品の供給を受けて暮らすことになれば、いつまで経っても朝鮮人民の生活は向上せず、大国の顔色をうかがって卑屈に

生きるほかなくなります。

革命と建設で自主の原則の堅持を信条・生命線としていた金日成主席は朝鮮人民の自主的要求を踏まえて、大国主義者のコメコン加入強要を断固として拒絶し、自立的民族経済の建設に取り組んだのでした。

大国主義者の圧力に屈してコメコンに加入した国々は、ソ連の崩壊を前後しておしなべて社会主義を放棄したのでしたが、人民の利益にそって自立的民族経済の建設を果たした朝鮮は、世界政治の風浪にもまれることなく自主の堡塁をりっぱに守り抜いたのです。これは、国家・民族と人間の運命開拓で経済的自立の持つ意義がいかに大きいかを雄弁に物語っています。

国家・民族の自主性と人民大衆の運命開拓は、自らの強力な軍事力に支えられて進められます。こぶしが弱ければ、そのこぶしで涙をぬぐうほかなくなるものです。強力な自衛的軍事力がなくては、政治における自主も、経済における自立も空言にすぎませんし、そのような国家・民族は侵略者にまともな抵抗もできずに屈服する恥辱を味わうほかないのです。

一九九九年のバルカン戦争。これはソ連・東欧社会主義諸国の解体後、ユーゴスラビ

ア（当時）の軍事的弱体につけこんで、アメリカが、その不当な要求に従わないとして、世界の平和と良心をしりめに、国際法を蹂躙して侵略に乗り出した戦いでした。かれらは、七十八日間の戦いに二千余の巡航ミサイルと千二百余の航空機を投入し、延べ二万五千余回にわたる無差別爆撃を加えたのでしたが、ユーゴは、一万二千メートルの高空からおそいかかる敵機や、三百キロメートル先の海上でミサイルを発射する米空母などの艦艇を打撃する手段がなかったばかりに、ろくに反撃もできず、あえなく敗北してしまったのです。戦後ユーゴの一高官は、「われわれはこの戦争から自衛的国防力強化の必要性を痛感した。周辺諸国がＮＡＴＯに合流し、あれほど頼りにしていたロシアもそっぽを向いているのを見て胸がはり裂けそうだった。結論は、一にも二にも自衛力の強化をはかることだ。ここにのみ生きる道がある」と慨嘆し、遅ればせながら教訓を引き出したのでした。

思想における主体、政治における自主、経済における自立、国防における自衛の原則のどれ一つがかけても、その国の人民はそれぞれの運命の主人としての地位を確保することも、それを自力で切り開いていくこともできないのです。これは、人類が血の教訓として得た貴重な真理です。

2　創造の方法で

　人びとが自己の運命を正しく開拓していくためには、自主の原則の堅持に加えて、創造的方法をもって活動しなければなりません。
　金正日総書記は「創造的方法を具現し、革命と建設におけるすべての問題を人民大衆の創造力に依拠し実情に即して解決するのは、つねに革命運動で堅持すべき原則です」と指摘しました。
　人間は創造的存在であり、かれらの運命を開拓する社会的運動は創造的性格を帯びるのですから、創造のない運命開拓というものは考えられません。自らの自主的志向・要求を実現するためには、高度の創造力をもって、周囲の環境と状況を見極めつつ社会をたえず改造変革していくことによってのみ、自己の運命をよりよく切り開いていけるのです。
　創造的方法は、無限の創造力の持ち主である人民大衆に依拠し、そのときどきの環境や状況などの実情に即して独創的に解決していく方法です。

創造的方法で自己の運命と国家・民族の運命を切り開いていくためには、無限の創造力の持ち主である人民大衆にしっかり依拠しなければなりません。人民大衆は社会の発展をおし進める決定的な担い手であります。ですから、あくまでもかれらに依拠しその創造力を高度に引き出すとき、運命開拓のたたかいは力強くくりひろげていけるのです。いかにすぐれた素質と能力の持ち主であっても、個人の力は大衆の力に及ぶべくもありません。人類が歴史的に蓄積してきた運命開拓の知識と経験を総体的に体得しているのは、個人ではなく人民大衆なのです。

人民大衆の創造的な知恵と力に依拠するとき、世に恐れるものがないということは、朝鮮人民の英雄的抗日武装闘争史に誇らしい一ページをかざった小汪清遊撃根拠地防衛戦の実例を通しても知ることができます。

満州の占領後、中国大陸への侵攻を準備していた日本帝国主義は、遊撃根拠地を目の上のこぶとして、揺籃期に革命の策源地を抹殺すべく数千の精兵に新式の砲や航空機を大量投入して侵攻してきました。これに比べて遊撃根拠地には歩兵銃のようなものしかない中隊程度の遊撃隊が駐屯しているだけでした。

常識では絶対に勝ち目のないこの防衛戦を前にして、朝鮮人民革命軍司令官金日成主席は人民の力を信じ、かれらを奮い立たせるならば十分勝算があるとして、根拠地人民のなかへ入りました。主席に会った高齢の一老人は、自分も将軍の部下になる、遊撃区内の全人民が一丸となって立ち上がればきっと勝てる、と言いました。老人のこの意味深い言葉に大きく力づけられた主席は、人民が戦うというからには戦うべきである、人民が勝利を確信している以上戦えば勝つ、戦争の勝敗は人民の意志即ち人民の奮起いかんにかかっている、といま一度確信しました。

こうして主席は、老若男女を問わず、遊撃区の全人民を奮い立たせて小汪清遊撃根拠地を難攻不落の要塞に作り上げ、かれらの創意を引き出しつつ変幻自在の戦略戦術をもって無敵を誇る日本軍を撃破し、根拠地をりっぱに守り抜いたのでした。

創造的方法で自己の運命と国家・民族の運命を切り開いていくためには、自国人民に依拠することにとどまらず、すべての問題をそのときどきの実情に即して解決していかなければなりません。

各国家・民族の環境と状況は同一ではないのですから、国家・民族の運命開拓にとっ

て万能の処方はありません。

各国家・民族は、既存の理論や他国の経験を鵜呑みにすることなく、国情に即した独自の方式・方法を考究し、具現して社会の発展を促さなければなりません。革命に先に成功した国や大国で生み出された理論や経験はあくまでもそれぞれの環境や状況を反映したものですから、それらがそのまま自国の実情に当てはまるとは言えません。ですからつねに国情に即した独自の理論・方途を考え、他国の経験も実情に合わせて合理的に導入するのが、ほかならぬ創造的方法です。これは、自分の好みに合う食べ物を常食としながら、外国産の変わったものを食べる場合は、一応味を試してみて口に合えば食べ、合わなければ吐き捨ててしまうことと同じようなものです。

朝鮮人民の抗日大戦当時、遊撃根拠地の政権問題をめぐって起きた混乱と収拾過程は、自らの運命の開拓で事大主義と教条主義が実に危険であり、何事であれ、すべての問題をあくまでもその具体的な実情に即して解決すべきであることを確証しています。

最初、事大的な左翼日和見主義者はソ連式のソビエト政権を立て、朝鮮社会の発展水準と朝鮮人民の生活感情を考慮することなく、教条主義的に即時社会主義の実現という極

左的スローガンをかかげて私有財産の撤廃を宣言し、土地と食糧はもとより鎌や鍬、フォークのような農具に至る個人所有の動産と不動産をすべて共同所有にし、遊撃区内の全住民が共同生活、共同労働、共同分配という新秩序のもとで暮らすよう強要しもしました。その結果、遊撃根拠地内には収拾しがたい動揺と混乱が生じ、ソビエト施策に不満を抱いた、少なからぬ人たちが家族もろとも敵の支配地へ居住地を移すまでに至りました。その原因は、自国の実情を無視した事大主義と教条主義にあります。

この混乱は、金日成主席が朝鮮革命発展の具体的な条件と環境に即した独創的な人民革命政府路線をうちだし、極左的なソビエト政府路線を排したことで収拾できたのでした。

主席は、アメリカ帝国主義の武力侵攻を撃退する朝鮮人民の正義の祖国解放戦争で、外国人は食事を取る際フォークとナイフを用いるが、朝鮮人は匙と箸を使う、われわれは外国流の戦法ではなく、われわれの戦法で戦うべきだとして、さまざまの独創的チュチェ戦法を編み出して戦争を勝利へと導き、アメリカが下り坂を歩むことになる端緒を開いたのでした。

今日帝国主義者は、世界「一体化」の流れに乗らない国は、永久に立ち後れた貧困国

として残るだろう、と騒ぎ立てながら発展途上国に西側式価値観を植え付けようとしていますが、これに惑わされた少なからぬ国が、自国の実情にはおかまいなく「グローバリゼーション」のつむじ風に巻き込まれ、西側式「民主主義」を取り入れた結果、今世界の多くの地域や国では、冷戦構造のなかで沈静化していた諸国間・民族間・種族間の抗争や国境・領土紛争が爆発的に起きています。一国内の諸民族が一瞬のうちに政治的混乱のるつぼのなかで右往左往し、多くの人民が血を流し、難民となって放浪する今日の現実は、自国の実情に即してすべての問題を創造的に思考し解決する創造的方法のみが、人民大衆の運命と国家・民族の運命を正しく切り開いていくうえの要諦であることを再度確認しています。

3　思想の力で

人間が自己の運命をりっぱに切り開いていくためには、自主の原則を堅持し創造的方法を具現することにとどまらず、思想の力を高度に発揮すべきです。

先にも述べたように、人間の活動で決定的役割を果たすのは思想意識ですから、人間の運命開拓でも思想の力を高めることは極めて重要です。思想の力は無尽蔵で、どんな近代的な物質的・技術的手段や原子爆弾のようなものの力よりも大きいと言えます。

金正日総書記は「革命運動において人民大衆の自主的思想・意識は決定的な役割を果たすため、革命と建設では必ず思想を基本にとらえ、人民大衆の自覚性と積極性を高めるための思想改造、政治活動をすべての活動に優先させなければなりません」と述べています。

朝鮮は二十世紀末、帝国主義者の孤立圧殺策動とうちつづく自然災害によって、最悪の試練が折り重なる「苦難の行軍」と言われたきびしい一時期を経ました。他の国や民族

であったら、何度挫折したかも知れないような苦難の時期に朝鮮は、それをただじっと耐え忍んだのではなく、その間にも無数のモニュメンタルな創造物を立ち上げました。そのなかには、朝鮮人民軍の手で建設された大規模の安辺青年発電所もあります。世界の世論は、朝鮮は苦難に耐えて生き残るだけでも勝利であり奇跡である、こんな時にそんなに膨大な工事をやり遂げられるだろうかと疑い、帝国主義者やその同調者たちも「紙上の発電所」だと誹謗したものでした。ところがこの発電所は奇跡のように立ち上がったのです。その力は、なんらかの近代的技術手段ではなく、革命的軍人精神という偉大な思想の力でした。

金正日総書記の命令にこたえた発電所建設者たちは、「敬愛する最高司令官同志の命令を貫く前には、祖国の青い空を見るべきでない！」という信念の合い言葉を叫びながら各建設場でたぐいない献身性と胆力、犠牲精神を余さず発揮しました。かれらは工事期間、百二十八か所の崩落区間と三千七百余か所の事故予想地帯を目前にし、また、腰や胸までつかる浸水のなかでも、瞬時として建設場を離れず、工事を続けました。軍人建設者たちは発破の際の事故で負傷したときも、切羽に残って作業に取り組みました。また、こんな

こともありました。崩落事故でトンネル内に閉じこめられた軍人たちは、数日間飲まず食わずの状態にありながらも、戦友たちがエアパイプを通してまず握り飯を送ろうとしたとき、飯よりも削岩機用の圧縮空気を送れ、と叫んだそうです。世界の閘門建設史上大きな波紋を起こした朝鮮西海（ソヘ）閘門工事の量の二倍を上回る安辺青年発電所の建設は、このような軍人建設者たちの不死身の思想・精神によって遂げられたまさに奇跡中の奇跡と言える成果でした。

これは、人間が思想の力、精神力を最大限に奮い起こせば、いかなる困難や試練にもくじけることを知らず、必ずや志を貫くということを人びとに悟らせるものです。

革命的軍人精神によって代表されるこのような不屈の思想・精神こそ、人間のもっとも偉大な無敵の力であり、精神的強者こそ何者も太刀打ちできない世界最強の強者なのです。

思想の力、精神力はこのように無限大ではありますが、決しておのずと発揮されるものではありません。

人民大衆の運命と国家・民族の運命の開拓で思想の力をいかんなく発揮させるためには、なによりも人びとの思想改造を優先させなければなりません。自己の運命を自らの責

任のもとに必ず自力で開拓していくというゆるぎない思想観点を抱くときにのみ、人間は自己の運命の主人としての役割をりっぱに果たせるのです。奴隷的屈従思想のとりこになった人に運命開拓の積極的な活動を期待することはできません。

人民が思想・精神的に瓦解すれば国家・民族が取り返しのつかない悲運に見舞われるという実例は、イラクの事態に求めることができます。

二〇〇三年三月、アメリカが起こしたイラク戦争で、イラクが手もなく敗北したのは、近代兵器の劣勢によるものではなく、アメリカの巧妙な心理謀略戦にかかり、軍民が思想・精神的に瓦解したからだと言えましょう。イラク戦争でアメリカは二千八百万枚ものビラを撒き、巨資を投じて放送局を設けたうえ、特殊作戦機を飛ばして毎日十七時間、五周波数による宣伝放送を強行したのですが、ここで、サダム政権に反対しアメリカ軍を歓迎するよう呼びかけ、さもなければ死を免れない、アメリカはサダムの独裁支配を排しイラク人に自由をもたらすために戦っている、などと宣伝しました。かれらはさらに、いろいろなルートを通じてイラク将官たちと接触し、降伏すればアメリカ市民権を与え安楽な生活を保証する、と懐柔しました。こうしてイラク軍部の中枢が骨抜きにされ、「抵抗す

るな」という命令を受けた将兵はほとんどが戦意を喪失し、アメリカ軍が現われると、われ先に逃げ出すという醜態を演じ、イラク軍は完全に崩壊してしまったのです。イラク人は、アメリカ軍が都市に迫っても市場でにぎにぎしく買い物をし、はては侵略者を「解放者」と信じて歓迎する始末でした。

人びとの思想的覚醒は、思想の力、精神力を高揚させるうえでの先決条件です。

朝鮮で数千年存続した封建的土地所有関係を一掃する重大な革命が、歴史にたぐいのないわずか二十日余りの間にりっぱに遂行されたのも、人民の思想的覚醒を抜きにしては考えられません。久しい歳月土地に縛られて地主の搾取に苦しんできた農民は、国の解放後も、自分たちが土地の主人になることまでは、ほとんど考えていませんでした。

ところが金日成主席は、土地改革の早急な実現によって農民を一日も早く土地の主人にならせるべきだとし、この難題をとどこおりなく遂行するためには、なによりもまず農民を思想的に覚醒させ準備させるべきであるとして、秋の取り入れに際し、それまで収穫量の五十パーセント以上を地主に取られていたのを三十パーセントに抑え、小作人が七十パーセントを取る三・七制闘争を発起し、このたたかいを通じて広範な農民大衆を土地の

主人として覚醒させるよう配慮したのでした。こうして思想的に覚醒した農民大衆のたたかいは旭日昇天の勢いをなし、これに気圧された地主たちはこれといった抵抗もできず土地改革を受け入れたのでした。

このことは、人民大衆が思想的に覚醒して立ち上がるならば、いかに膨大困難な社会的変革もりっぱにやりとげ、人民大衆の運命がりっぱに開拓されていくということを物語る好例だと言えましょう。

人民大衆の運命と国家・民族の運命の開拓で思想の力を高度に発揮するためには、人びとを思想的に覚醒させるとともにその力をフルに働かせるための政治活動を活発にくりひろげることが大切です。

第二次世界大戦でソ連軍がファシストドイツ軍を撃破したのは、兵員数や武器にまさっていたからではありません。ソ連軍には他の国の軍隊にはない政治機関がありました。そこには、二十四万名の専従政治活動家など多くの政治要員が配属されていて、ソ連軍将兵を社会主義祖国防衛の戦いへと奮い立たせたのでした。自分たちの戦いの正しさを自覚し、社会主義愛国主義にのっとって無比の勇敢性を発揮するソ連軍の前に、無敵を誇る

ヒトラー諸師団は壊滅したのです。こうして第二次世界大戦は、ソ連の決定的役割により社会主義と世界反ファッショ勢力の勝利をもって終結したのでした。

朝鮮の首都平壌(ピョンヤン)市の中心部万寿台(マンスデ)の丘にあって朝鮮の気象を象徴している千里馬銅像は、ここを訪れる人びとの目を奪っています。

朝鮮は、三年間の苛烈きわまる戦争で全国が灰燼に帰した非常に苦しい状況のもとで社会主義革命と建設の途についたのですが、当時、国内ではなにもかもが不足していました。それにアメリカに操られた南朝鮮の支配勢力が「北進」キャンペーンを狂気のようにくりひろげ、社会主義陣営内部には大国主義者が台頭して、かれらに従うよう朝鮮に圧力を加えていたのです。

ところで金日成主席は、朝鮮の革命と建設はあくまでも人民の思想・精神力を奮い起こすことでおし進めるべきだとして、戦後の復興建設を前に降仙(カンソン)製鋼所を訪れ、労働者たちと話し合いました。主席は、複雑な国内外情勢と前途にどのような困難が立ちはだかっているかを説明し、今のこの困難にひるんで革命闘争と建設事業の手をゆるめるべきではない、党は労働者階級を信じてみなさんに期待をかけている、みなさんが来年の鋼材の生

産で計画外に一万トンをもっと生産すれば国は腰を伸ばせる、わたしはみなさんを信じ、みなさんはわたしを信じてこのきびしい難局を打開していこうではないか、と切々と呼びかけました。

主席のこの訴えは労働者たちの魂を揺り動かし、かれらの精神力を活火山のように発奮させました。製鋼所の労働者たちは怒涛のような意気込みで、内部に埋もれていた潜力を積極的に掘り起こし、人びとの間に見られた消極性と保守主義、技術神秘主義などを打破して、ついに通常能力年産六万トンの分塊圧延機で、十二万トンの鋼片を圧延するという大成果を挙げたのでした。かれらのたたかいに励まされて、全国的に革命的大高揚の炎がはげしく燃えさかったことは言うまでもありません。

朝鮮には「千里馬」の伝説がありますが、金日成主席は、朝鮮の労働者階級と人民が党の呼び掛けにこたえて集団的革新運動を力強くくりひろげているが、これこそ伝説の千里馬が現実になったのだとして、この全国的大高揚運動を「千里馬運動」と呼ぶことにしようと言い、千里馬運動をいつまでも記念し、朝鮮の不屈の気象を世界に誇示するため、千里馬銅像を空高く建てるようはからいました。

人民大衆の思想の力、強力な精神力は千万金とも替えられない民族の第一の宝であり、原子爆弾よりも威力の大きい最強の武器です。不屈の思想の力、精神力を持つ人民がいれば、その国はどのような難関に遭遇してもそれは一時的なものであって、前途は洋々とし、国の強盛繁栄は間違いなく実現することになるのです。

むすび

実践は真理の基準であり、試金石です。思想の真理性と価値は、それが人間の運命開拓のたたかいにどのような結果をもたらしたかによって検証されます。自然と社会を改造し、新しい生活、新しい世界を作るたたかいで大きな成果をもたらす思想だけが、人民大衆の運命開拓の正しい道を示す真の指針となるのです。

チュチェ思想は朝鮮に世紀的な変貌、輝かしい勝利をもたらしました。チュチェ思想を運命開拓のたたかいの唯一の指針としてきた朝鮮は、国際的地位を著しく高め、個々の

朝鮮人たちの境遇でも目を見張るような向上が遂げられたのです。
朝鮮は二十世紀初め、日本に国権を奪われ植民地に転落しました。一九〇七年六月、オランダのハーグで開かれた第二回万国平和会議に派遣された朝鮮代表が会議への参加を拒絶されて割腹憤死するという一件がありました。朝鮮はそのような弱小国家、封建的後進国だったのです。ところが今日は、人工衛星発射国、核保有国として世界の先進国と肩を並べ、強盛国家の建設を成功裏に進めています。
朝鮮人の境遇と生活はどう変化したでしょうか。
以前、帝国主義侵略者と反動的搾取階級から虫けら同様に扱われていた人たちが、今日では工場と土地の主人、国の主人となって、あるいは英雄称号を受け、あるいは最高人民会議代議員となり、全人民は無税、無料教育、無料治療の保障された、社会主義地上楽園のもとで、よりすばらしい運命を開拓すべく努力しています。
これらの変貌は全的に金日成主席と金正日総書記の思想であり、朝鮮人民の唯一の指導思想であるチュチェ思想によってもたらされた貴重な実りです。
朝鮮人民はチュチェ思想を運命開拓の唯一の指針、何物にも変えがたい生命にも等し

いものとみなしており、チュチェ思想が示す道にこそ、人民の幸福があり、国家・民族強盛繁栄の道があると確信しています。

しかし、チュチェ思想はただ朝鮮人民にのみあてはまる思想ではありません。

今日、世界にはチュチェ思想国際研究所をはじめ諸地域・諸国家にチュチェ思想研究組織があり、チュチェ思想の研究討論および普及活動が活発に進められています。ここ十年ほどの間にもさらにロシア、カナダ、アメリカなど五十数か国に百余の研究組織が生まれ活発に動いていることも注目に値します。

これは、人間の運命開拓のもっとも正しい道を示すチュチェ思想が国際社会各界と進歩的人類の一致した共感のもと、それを生活に具現していこうという熱望の顕著な表われだと言えます。

人間の運命開拓のもっとも明確な旗じるしであるチュチェ思想に沿って進む人民大衆の前途には、限りなく明るい未来が約束されています。

人間の運命とチュチェ思想

出版：朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社

発行：チュチェ 101(2012)年 3 月 30 日

ㄱ－2835024

E-mail: flph@star-co.net.kp

http://www.naenara.com.kp

ISBN 978-9946-0-0811-0

9 789946 008110 >

朝鮮・平壌

チュチェ101(2012)年